

インドネシアと日本の食生活について
(第2報) インドネシアにおける栄養指導
茨城女子短大 松永暁子

〈目的〉インドネシアでは、国民の栄養摂取の向上、とくに村の乳幼児の健康増進のための食生活改善が進められている。演者らはさきに¹⁾、中部ジャワのチョプラン村で食生活の実態を調査し、栄養摂取のあり方についていくつかの問題点を見出した。これらを改善するてがかりとして、比較的栄養のバランスがよいとされている日本の食生活の実情を知るため、水戸市で普通の家庭の食事を調査し、比較した。今回は、インドネシアにおける栄養指導・食物教育の実情を知る目的で現地を調査を行った。

〈方法〉①ジャカルタ市郊外の村で、乳幼児の検診、および主婦を対象とした栄養指導の実際を見学した。②ジャカルタ市および郊外の小・中・高校の家庭科の食物教育の実情を調査した。③所轄官庁を訪問すると共に、資料を収集した。

〈結果〉インドネシアにおける栄養指導は、政府・厚生省を中心に「家族の栄養改善努力(UPGK)」活動が、中央から地方の村に至るまで組織的におし進められていた。とくに村では、POSYANDUと呼ばれる5歳未満児とその母親を対象とした乳幼児の検診、家族計画、栄養指導活動が行われていた。食品群の分け方は、4つや5つの方法が多かったが、日本と同じ6つの食品群も用いられている。学校教育の中では、栄養、食教育は主として家庭科で扱い、家庭科は小・中学校では必修で高校は選択であるが、男女共修で仲よく調理実習を行っていた。国づくりの基礎とも云うべき国民の健康・栄養の向上に政府は真剣に取り組み、村では活発な普及活動が行われていた。

1) ワティ イワヌデイン, 松永暁子: 第41回日本家政学会研究発表要旨P98(1989)